

5. 翻訳

ここには、朝鮮半島で旧日本軍が初期に作製した地形図の復刻図集『舊韓末韓半島地形圖』（1996年刊）に付された南榮佑高麗大学教授の解説の翻訳を示している。韓国における外邦図に対する関心、研究状況だけでなく、南教授の探索過程などについても重要な点が多く、広く関係の研究者に読んでいただきたい。

『舊韓末 韓半島 地形圖』

1:50,000

ナム・ヨンウ

南 榮 佑 (高麗大学教授) 編著

朴 澤龍(大阪大学文学研究博士後期課程) 訳

図書出版 成地文化社

TEL : (02) 795-9941・7200・1700

FAX : (02) 798-7780・749-6640

展示場 : 成地地図センター (02) 277-4343・4344

漢城地図センター (02) 749-6641・6642

釜山地図センター (051) 819-4200

【編集者の解説】

本稿は、高麗大学の南榮佑教授の編著『舊韓末韓半島地形圖』(全4巻、1996年)の巻頭に付された、同教授の解説の翻訳である。この地図集は、日本軍の秘密測量によって作製された朝鮮半島の地形図の複製を収録している。これらの地図の現物は現在では入手が困難で、外邦図の大きなコレクションをもつ大学・図書館だけで見ることができるものである。概要はすでに清水(1986)に紹介されているが、南教授が収集刊行されたこの地図集によって、その閲覧が容易になり、外邦図研究にたずさわる私たちは、たいへん感謝しているところである。

この地図集を入手した際、韓文で書かれた南教授の解説がどのような内容であるか、大きな関心をよせることになった。すでに英文で書かれたNam(1997)を読ませていただいていたが、それよりもはるかに長いこの解説には、韓国人の研究者のこの種の地図に対する関心、その収集過程、さらには研究の段階など、基礎的情報が満載されていると思われた。したがって、つぎにこれを日本語に翻訳できないかと思うことになった。幸い私の属する大阪大学文学研究科人文地理学教室には、語学に長けた留学生の朴澤龍君が在学中で、彼にこの作業を依頼することとなった。朴君は朝鮮族出身の中国人で、韓国語・日本語・中国語に堪能なうえ、漢字の知識も豊富で、わかりやすい訳文をつくってくれた。この訳文を読んで、ますます南教授に対する関心がわくことにな

った。学生時代にソウルの古書店でこの地形図をみつけて以来、日本の国立国会図書館、クラーク大学と追跡し、その成立の経過や背景にせまっていたプロセスは、たいへん興味ぶかい。また、韓国側でもこの秘密測量に関する研究がおこなわれていることも判明した。

こうした南教授に、私たちの研究会に出席していただけないか打診したところ、快諾していただき、2005年12月23日に立正大学大崎校舎で開かれた第7回外邦図研究会でお会いすることができた。そこでは、「韓国における外邦図(軍用秘図)の意義と学術的価値」(本誌所収)と題する南教授の発表をお聞きするだけでなく、同教授のお許しを得て、できて間もないこの訳文をコピーして参加者に配布することとなった。十分に細部を検討していない訳文ではあったが、南教授のお仕事とともに、韓国の研究者の関心を関係者に知っていただくきっかけをつくることができた。

ところで南教授が解説に書かれているように、秘密測量によってつくられたことを秘匿するため、この地図集所載の地形図にはほとんど測量年が記されていない。大阪大学文学部の卒業論文作成の過程で、岡田(谷屋)郷子があきらかにしたこの地図集所収の図の測量年(谷屋, 2004)について、この研究会の場で南教授にお伝えできたことも有意義であった。岡田は、旧陸地測量部にあった外邦図のリストである『国外地図目録』・『国外地図一覧図』(国土地理院蔵)

を検討することによって、従来知られていなかったこれらの図の測量年を示し、南教授の推定をうらづけることとなった。

ここに掲載する訳文は、このとき配布したものに検討をくわえたものである。簡単な訳注([]内に記入)のほか、固有名詞などについては、参謀本部・北支那方面軍司令部編(1979)、村上(1981)、測量・地図百年史編集委員会(1970)などを参照して原文を確認した。また末尾の英文要旨、” Intelligence Activities of the General Staff Office and the Making of Secret Military Maps” は省略した。まだ訳文の推敲の余地が大きい、関係の方々ひろく参照していただくことを期待したい。

(小林 茂)

文献(アルファベット順)

- 村上勝彦 1981. 隣邦軍事密偵と兵要地誌(解題). 陸軍参謀本部編『朝鮮地誌略 1』, 3-48, 龍溪書舎.
- Nam, Y. -W. 1997. Japanese military surveys of the Korean Peninsula in the Meiji era. In *New Directions in the Study of Meiji Japan*. Ed. By H. Hardacre and A. I. Kern, 335-342, Brill.
- 参謀本部・北支那方面軍司令部編 1979. 『外報測量ニコンエンタプライズ』.
- 清水靖夫 1986. 『日本統治機関作製にかかる朝鮮半島地形図の概要:「一万分一朝鮮地形図集成」解題』 柏書房.
- 測量・地図百年史編集委員会(1970) 『測量・地図百年史』 日本測量協会.
- 谷屋郷子 2004. 『朝鮮半島の外邦図の作製過程』 大阪大学文学部卒業論文.

はじめに

韓半島全体を含んだ日帝時代の5万分の1地形図が、1981年に日本で復刻刊行された[学生社『朝鮮半島五万分の一地図集成』]時、筆者は嬉しさと悔しさが混じった心境であった。嬉しさは日帝時代の国土の姿を確認できたことで、悔しさというのは、韓半島の基本図がわが国ではなく、日本で刊行されたことに対する筆者の率直な感想であった。この地形図は韓日併合直後の1910年から日本の陸軍参謀本部陸

地測量部が8年余りの作業の末、1918年に完成した地図で、学問研究において大いに役立った。

しかし筆者は、その地形図が製作された1910年代以前にも日帝が韓半島で測量事業を行っていたという心証を持っている。大学生時代に、ソウルのある古書店で偶然に購入した何枚かの地図が物証となった。その地形図には当然あるべき測量年度と凡例が注記されていなかった。その当時は、疑問に思っていたが、その地形図の正体を詳細には知っていなかった。

それから約20年後、筆者は日本国会図書館地図室で「略図」または「朝鮮略図」と呼ばれる韓半島最初の地形図を見つけた。それが1991年7月である。20余年前にソウルの古本屋で購入したものと同一の地形図だった。筆者は1994年にアメリカのハーバード大学ライシャワー研究所で開催した明治研究学会で論文を発表するためにマサチューセッツへ行った。ボストンの近くにClark大学があって、そこに有名な地図図書館があるという噂を耳にした私は、地理学科を訪問した。そこでも、問題の地形図に接することができた。

筆者は、19世紀に測量されたこの地図の存在と作成過程を学界に報告するために、1992年大韓地理学会で論文を発表し、それを韓国文化歴史地理学会誌(第4号)に掲載した。また、世界の学界にも知らせる為、1994年アメリカのハーバード大学で開催された国際学術大会で発表を行い、1997年ネデルランドのBrill出版社が刊行するNew Direction in the Study of Meiji Japanと言う単行本に掲載を予定している。その後も、筆者は朝鮮略図に関する調査を継続し、本書の発刊に至った。そして幸いにもよりたくさんの地図と文献を補完することができた。

日帝参謀本部によって製作された5万分の1地形図は全部で3種類ある。第1次に作られたのが本書に収録された略図で、軍事用として秘密に作成され、軍用秘図とも呼ぶ。第2次に刊行されたのは、韓日併合直後に略図を修正したもので、よく地形図と呼んでいるが、第3次の三角測量によって正式に作られたのは基本図と呼ぶ。1981年に日本で復刻、刊行された地図帳そのものが、第3次地形図としての基本図である。韓日併合前に間諜隊の測量によって作

られた第1次地形図と、それに若干の修正を加えた第2次地形図は略式目算測図であるため、正確さと精巧さから見て第3次地形図が当然優れているが、その地形図には日帝の植民地政策の推進下で改変された韓半島の姿が描かれている。

しかし第1次地形図は、わが国の最初の地形図として意味を持つだけでなく、日帝侵略前の朝鮮末ないし大韓帝国時の韓半島の姿が描写されており、韓国地理・韓国史・民俗学などの研究に大いに役に立つだろう。それだけではなく地名研究にも多くの資料を提供できると期待する。何故ならば、第3次地形図ではソウルのバムソムが「栗島」注記されてあるが、第1次地形図では日本語で「バムソム」と注記されており、純粋な韓国地名と古地名までもが研究できる資料を提供している。

本書が研究から出版に至るまで、たくさんの方々から援助と助言を頂いた。特に、筆者の研究成果を国際学術大会で発表できるよう招聘して下さったアメリカハーバード大学のM. Chamberlain 教授、C. Eckert 教授、カナダブリティッシュコロンビア大学のフナムリン教授に感謝を申し上げます。また何よりも地図収集に力を貸して下さった日本国立国会図書館地図室をはじめ、東京大学の谷内達教授、アメリカ Clark 大学地図室のB. J. Presley 氏、そしてゾークツン氏と北田晃司氏に心から御礼を申し上げたい。末筆に、本書の出版を心地よく承諾して下さった成地文化社チェ・ヒョンギョ社長、心を込めて編集に当たって下さったチェ・グァンウン常務に感謝の意を申し上げます。

1996年11月
ナム ヨンウ

1. 序論：地図の意味

地図の歴史は、人類の最も貴重な文化遺産として認められている文字よりも古いものである。自己の文字もない未開の民族であっても、彼らは地図を持っている。文化的に劣等な未開民族も、生活を維持するためには自分が生活している土地に関する地理的情報が必要である。それらを文字の代わりに記号や絵画で表現したのが地図の始まりであると言えよ

う。古代の狩猟民らは、初めて着いた土地で良い狩場を見つけたら、それを子々孫々伝えるために岩に書き込んだ。その石版には新しい土地が描きこみ続けられ、やがて彼らの世界観を詳細に表現する地図が完成する。

このように、地図には人々に必要な様々な情報が書き込まれることとなり、彼らの生活観や世界観が書き込まれ、価値観や人生観が記録されるとしても過言ではない。即ち、原始的な地図であったとしても、それには住民達のすべてが含まれていると考えられ、地図は地域住民のプライバシーと共にプライドに関わる存在でもありえる。このような観点から私たちは古山子-金正浩の「大東輿地図」[1861年]を高く評価する。しかし、金正浩の地図は現代的な観点から、正確さに欠けた前近代的な古地図に過ぎない。

しかし地図の価値は、必ずしもその精巧さや正確さによるものではない。仮に、測量・投影・製図・印刷などの技術的水準が高い地図であっても、利用者の目的によってはその価値が異なることもありうる。特に、古地図研究者と現代地図研究者との間で、我々はむしろ極端な差異を見つけることができる。古地図研究者の関心は、地図そのものより地図を通じて歴史を掘り出すか、古地図を収集し時代考証することに集中する。反面、現代地図研究者の関心は、官製地図の製作技術、表現法、読図教育に集まる。今日、そのような相違点にもかかわらず、いま古地図研究者と現代地図研究者との間で1つの共通点を見つけることができる。それは言わば、古地図を発達していない低度な地図として決め付けていることである。もし現代の「科学的な」地図を唯一の基準にするならば、即ち科学性を唯一の評価基準とすれば、それは正解かも知れない。しかし、地図の価値は科学性のみに頼られているのではない。距離と方位が歪曲していても、地図製作の目的によっては「非科学的な」地図が立派で価値のある地図になることがある。

一国の地図は当国家の必要によって製作されるのが普通である。もし、自国の地図がよその国によって製作されるとしたら、その国の自尊心は余地もなく傷つけられる。それは上述したように、地図には

当国民の生活観・世界観・価値観などが描かれているからである。それにもかかわらず、わが国の最初の近代地図が外国によって、それも日本によって秘密裏に製作されたとすればどうなるか？

今までは、日本が日清戦争とロシアの南進政策に備え、1895年に三組の臨時測量班が韓半島に派遣され、縮尺5万分の1の地図を刊行しようとしたが、暗礁に乗り上げ、1896年に測量事業は一旦中止され、一組だけが残り1900年まで予定を変更し縮尺20万分の1の地図を完成したとされている(国立建設研究所、1972、pp. 7~8)。しかし、事実はその以前から日本陸軍参謀本部所属の諜報員が韓半島に派遣され、地図製作のための情報収集を長年に渡って隠密に行い、それを土台に1890年代に入ってから本格的な準備作業に着手し、1906年まで地形図を刊行するための測量事業を完了していた。この地形図を「軍用秘図」と呼ぶ。この名称は、日本帝国の陸軍参謀本部が軍事用として秘密裏に製作した地図だとの意味である。この地図の本来の名称は「朝鮮略図」または第1次地形図とするが、本書では軍用秘図と呼ぶことにする。

2. 軍用秘図の製作

(1) 軍事地図の必要性

測量局[1884-1888年]および陸地測量部[1888-1945年]は、参謀本部内の独立機構でありながら他の部署との協調を得て、一般地図と軍事地図を製作しながらその技術を蓄積して行った。その当時に製作された基本図は日本国内のみを対象とした地形図であった。日本は19世紀末、世界やアジアの情勢が緊迫化し、1873年、維新政府に不満を抱えた士族らが征韓論を主張するようになると、韓半島政策に強硬策を取り入れ始めた。

その頃から、参謀本部の前身であった「第6局」は最初の海外諜報活動を開始し、雲揚号事件[江華島事件ともいう。1875年9月]を起こさせながら測量活動を強行した。韓国地図学史上、直測時代とも言える1877年以後に製作された韓半島地図としては、イギリス海軍省の朝鮮海図を始めドイツのシーボルトの朝鮮図などがあるが、正確さに欠けている。しかし、1875年11月に陸軍参謀局から発刊された「朝鮮全

図」のような、筆者が「朝鮮日報」紙(1991年7月3日)で言及したように比較的正確なものもある。この地図は韓国の古地図とイギリス・アメリカ・フランスなどで刊行された諸海図を総合し、咸鏡道出身の金仁承の協力を得て製作されたのである。

海軍とは違って陸軍の地図製作は測量に制約があるため、実地測量による地図の刊行は不可能であった。ソウルや釜山などの主要都市は1883年以降から部分図として発刊が始まった。地形図は、1890年代に入ってから約20年間を掛けた参謀本部の派遣将校らの諜報活動に負ったところが大きかった。

他国を侵略するためには、必ず地図が必要である。地図から得た情報を基に軍事作戦を練ることができからである。それだけではなく植民地経営にとっても地図は不可欠な存在であった。

(2) 軍用秘図の作成と測図時期の隠蔽

軍用秘図には測量時期を知るための測図時期が記載されていない。測図とは測量を意味するその当時の用語である。地形図に測図年代を明記することは、地図製作の基本でありながらも記載されていないということだ。しかし、地図の右側下端に“図式は明治28年式地形図の図式に準ずる”と記載されており、大体の測図時期は予測できる。

本地形図の原図と原版はすでに流失され、複写版のみが現在、日本国会図書館の地図室に所蔵されている。原版と原図は戦中に失われたと推定されているのみで、今までその所在は不明である。ただ、その一部がアメリカのClark大学に所蔵されている。当時、製作された484枚の図幅のうち39枚が失われ、445枚が現存している。

地形図には測図年度に加え、製版・印刷・発行年度を明記するのが一般的である。しかし、前述したように測図または製版年代は記載されず、印刷および発行年度のみを記した。445枚の図幅のうち最も早いのが明治44年(1911)3月10日印刷、同年3月15日に発行されたもので、遅く製作されたのが大正5年(1916)4月25日印刷、同年4月30日発行と記載されている。

すでに上で言及したように、日本は地形図を発行しながらも軍用秘図の測図年代を明らかにしていな

かった。日本で地形図が初めて極秘文書扱いされたのが、太平洋戦争が勃発した1941年のことである。ここで私はその点に疑惑を感じ、謎を解く気持ちで究明を試みた。

この地図が1910年に臨時公開されたことを陸軍参謀本部陸地測量部が編纂した『陸地測量部沿革史』(1921)で確認できる。何故よりによって1910年に公開されていたのか？その理由は、韓日併合によって強制的に韓国の主権を奪ったからである。韓国はもはや主権国家ではないとし、軍用秘図を公開しても問題にはならないと判断したに違いない。用意周到な参謀本部が何の対策もなしに、地図測量のような主権侵害の事実を自ら自認するような証拠を残そうとはしなかった。即ち、発行年度は残すにしても、測図年代は削除したと考えられる。発行年度は最も早いもので韓日併合後の1911年になっているため、瑕疵がないと彼らは判断したのだろう。しかし、日帝はミスを図式で露出してしまった。

この地図の多くは「明治28年式」の図式によるものだが、遅く刊行されたのは「明治33年式」の図式に準じている。それぞれ1895年と1900年に該当する。日本地形図の図式変遷はフランスとドイツの図式を模倣した「明治13年式」と「明治18年式」をはじめ、「明治28年式」→「明治33年式」→「明治42年式」→「大正6年式」へ改良されて行った。これらを西暦に変えると各1880、1885、1895、1900、1909、1917年に該当する。軍部が、地図製作事業を握った後に採択した「明治13年式」と、5年後に変更され「明治18年式」として通用するフランス式およびドイツ式図式は、日本の地形がフランスないしドイツと相違しており、地図体系と水準点設定に難点が続出したため「明治28年式」に変えられた。

上述したように、図式の変遷過程が分かれば測図時期も推定可能になる。仮に、当時に刊行された地形図の中で図式が「明治28年式」であれば、その図の測図時期は1895～1900年の間で、図式が「明治33年式」であれば測図時期は1900～1909年の間となる。軍用秘図は計484枚の図幅のうち忠清道「成歎駅」図幅が最初に測量されたと現われている。即ち、この図幅の測図年度が明治27年(1894)と記載されている。しかし「成歎駅」図幅は、早速、明治29年(1896)

に測図した「成歎」図幅に代替された。元の測図年度が1894年だとすれば、当然その地形図は「明治18年式」の図式によって製作されたはずである。上述したように「18年式」はドイツ式の図式であるため日本の地図体系とは合わなかっただろう。このような理由から、「成歎駅」図幅が即時に「成歎」図葉によって代替されたのではないかと推定できる。

以上からみると、軍用秘図の図式の多くが「明治28年式」に従ったとすれば、製図は遅くとも1900年前に行われていた事は明らかである。「陸地測量部沿革史」では、1898年末に韓国人研修生であるイ・ズファンが、初めて測量技師養成所であった修技所を卒業したとの記事があり、1897年1月には“韓半島の地形図は、5万分の1縮尺である遼東半島の地形図と同一図式によって製作することにする”と言う記事もみられる。

軍用秘図の測図年度はすべての図幅から故意的に削除された。しかし、参謀本部は決定的なミスを犯してしまった。そのミスとは、慶尚南道「三嘉」図幅の測図年代を削除できなかったことである。この図葉の左側上段には明治32年(1899)測図と記載されている。

私は、1991年7月と1994年2月に日本[国立]国会図書館およびアメリカClark大学図書館に所蔵されている軍用秘図の存在を確認しながら、意外な成果を得た。それは即ち、陸軍参謀本部陸地測量部の保存用地図を入手したことである。私は、軍用秘図が1910年臨時公開された時に、公開用と保存用とに分けられていたことを後になって気付いた。保存用地図の右側上段には「秘」または「軍事機密」の印が押され、左側上段の測図年代は削除されていないまま表記が残っている。これにより筆者は、日帝の測量侵略の事実についての動かぬ証拠を確認したことになる。

3. 軍用秘図の内容と製作方法

(1) 軍用秘図の内容

軍用秘図は1894～1906年の12年間に渡って測量されたものである。このうちの大部分の図幅については1895～1899年の間に測量された。この時期は韓日併合の11～15年前に当たる。日本帝国は当時、独

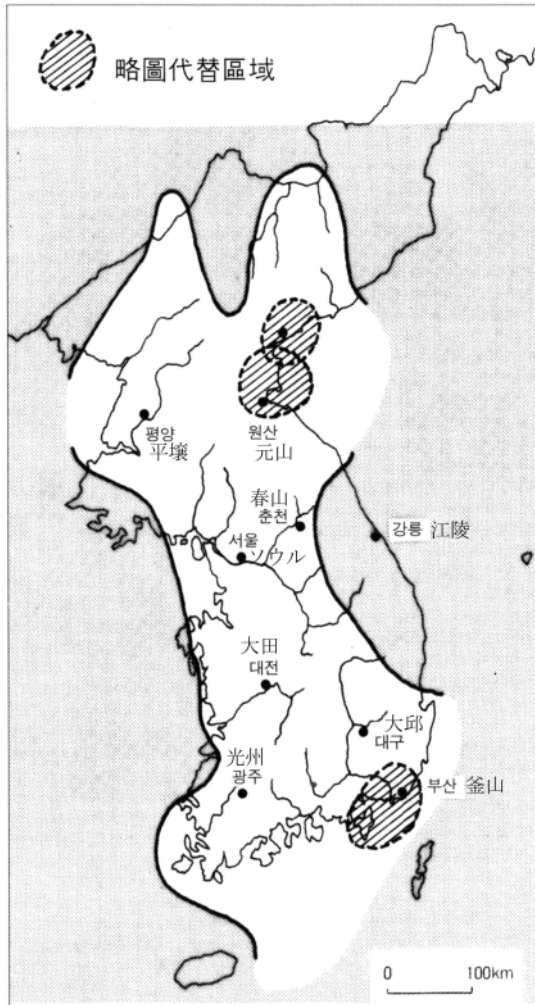


그림 1. 군용비도(조선약도)의 간행구역
 図1. 軍用秘図(朝鮮略図)の刊行区域

立主権国家であったわが国に対して、陸軍参謀本部が中心となり不法行為を犯したのである。このような事実について、比較的親韓学者に分類される人さえもが、当時の韓国がいくら弱小国家であったとしても、主権国家に対する組織的な測量は不可能だろうと推定している。

「略図」または「朝鮮略図」と呼ばれる軍用秘図は、前述したように484枚の図幅から構成されている。これらには咸境北道・平安北道・江原道の一部および済州島と釜山・元山等が欠落しており、韓半島の全体は覆われてはいないが、主要部はほぼ含まれている。現在、国内で流布しているか、所蔵されている日帝時代の第3次地形図は、韓日併合後に刊行されたもので、計722枚もの図幅がある。即ち、軍用秘図は韓半島の約61%に相当する地域を測量して作られた地形図であることが分かる。

軍用秘図は、特に京義線・京釜線・湖南線・京原線の鉄道敷設の予定地を100kmの幅を持って、韓半島を南北に貫通している。そして南海岸一帯の島嶼地方が漏れなく集録され、北部地方の森林地帯と鉱産地帯が含まれている。一方、軍事拠点として指定された釜山・元山のような主要諸都市は抜け落ちているが、元来の精密略図で代替された。京釜鉄道株式会社(1903年)が発行した「韓国京城全図」が、1890年代後半に測量された内容を基に作られたと推定すると、精密な略図で代替された上述した地図は、最も精密で縮尺が8千分の1~1万分の1であったはずだ。

軍用秘図は、間諜隊が隠密で迅速に測量したものであるため、正確さでは劣っているが、わが国の古代の地名・言語・歴史の一断面を解明できる資料を提供する。この地形図の地名は訓読名・古訓読名・古借字名で表記されたところが多い。朝鮮末期までわが国の地名は、漢字表記が多く音読主義だったため、純粋な韓語地名を知ることはできなかった。もちろん、民間において韓国の固有地名が使用されていたかも知れないが、残っている記録はないと知っている。例えば、ソウルの韓江にある「バムソム」の場合、金正浩の大東輿地図と日帝下の朝鮮総督府の地形図では「ユルトウ」と記載されている。しかし、軍用秘図では、漢字で「栗島」と表記しその隣に日本語で「バムソム」と注記されている。このように、軍用秘図の地名は、当時の国内で公式に使用された漢字地名と並行して、日本語の外来語表記文字であるカタカナで注記されており、研究の価値が高い。その中には、漢字を現代の韓国語発音で表記したのが大部分であるが、本地図の地名を分析したことがある光岡(光岡雅彦、1982)によると、記載された地名のうち約20%が古訓または古借字名で表記されていると言う。

韓日併合後、土地調査事業を始めてから、韓半島には新道および鉄道が敷設され、橋梁とダム等が建設された。海岸では干拓事業が行われ農村では農地改良事業が始まった。こうして国土は大きく姿を変えた。しかし、軍用秘図には変わる前の国土がまさに処女時代の姿のように描かれており、韓半島の本来の姿を知ることができる。ただ平壤付近の図幅に

は、京義線鉄道が描写されている事実を確認できる。京義線は1900年、韓国政府の鉄道自力経営方針に従い鉄道院を設置し、1902年に着工した。ロシアに宣戦布告をした日本は、軍需品の輸送に必要な鉄道を確保するために、1904年2月に臨時軍用鉄道監部を組織し、同年3月に起工式を行った。平壤付近を通過する京義線は1905年1月に竣工した。ここで私たちは1つの疑問を感じる。平壤一帯の地形図の「看東」図幅の場合、図式(明治28年式)から1895~1900年の間に測量されたことが分かる。しかし、その時期には鉄道が敷設されていなかったため、結局1911年に鉄道を記入して発行した第2次地形図として判断するしかない。

(2) 軍用秘図の作製方法

一般的に地図製作の技術とは、具体的には測図法・図式・製版の3つを意味する。これによって陸軍参謀本部陸地測量部の組織も三角課・地形課・製図課から編成された。これらの中で三角課は大三角網を設定し、2等・3等三角点および水準点を定め、測量後に一枚の図幅に図根点の位置を決定する業務を任された。約2kmの間隔で設定された図根点の、最も近い所に地形図に記入すべき物体があったら、アリダードと呼ばれる機械を使って平板上に記入する。

地形課は、三角課から作業済みの図葉を受け取って、表記と標高を記入する作業を担当した部署である。製図課は地形課から受け取った資料をまとめ、原図を作り銅版と鉛版を作る業務を任された。製図の際に最も重要なのは、地図の表現方式とも言える図式の決定にある。地図とは地面の絵であると同時に、地面そのままの表現ではなく定められた記号で表現されたものなので、図式と記号に付いては事前に知識を積んで置かなければならない。

明治維新以降、北海道の測量事業を展開した日本は、地図製作のノウハウを築いていた。日本は、1884年には迅速図[第一師管地方二万分一迅速測図]と仮製図[京阪地方仮製二万分一地形図]を製作し、短期間で地図を製作できる能力を育てた。日本政府内に測量局が設置されるとともに測量技師を育成する修技所が発足された。ここで多くの測量技師が生まれたことは言うまでもない。今では製図技術が発達し、航

空写真や衛星写真によって地図を作るが、当時はスケッチに依存した。

軍用秘図を略図と呼んでいるのは、短期間で迅速かつ隠密に作られた迅速図であるからだ。しかし、むしろスケッチ自体が略図であっても、最大の正確さを期することで図幅間の誤差を最小化することができる。

このために測量士たちは猛訓練を受けざるを得なかった。スケッチに依存する目測図は、方位線の決定状況によって誤差度を減らすことができる。なぜならば、観測地点から目標物が離れば離れるほど若干の方向誤差が累積され、大きな誤差を発生させるからである。そして距離の正確な測量が不可能な場合、歩測によるか、それも困難な場合は目測で測量したはずである。

目測によって地図を製作する際には、山岳地帯で多くの誤差が発生する。特に、標高と山地斜面の測量で難関に遭遇する。高度計や傾斜計を使用できない場合、三角測量でも可能だが、隠密な測量しかできないスパイの身分では不可能なことだ。大体に、距離は目測でもある程度可能であるが、高度に対する目測は極めて困難である。

軍用秘図の測図は、測量士が溪谷口に位置する200~300mの山頂に登って鳥瞰しながら地形を描写する目測術によったものと推定できる。この地形図を綿密に分析してみると、溪谷の入り口部分と主要道路の位置関係は比較的正確であるが、谷の奥の部分は誤差が多く、歪曲されて現われていることが分かる。また、地形図には図根点とみられる地点に標高が記載されている。それはもちろん、正式な水準測量によるものではなく略式目算測図で算出されたものである。高度は簡単な斜角儀と水平目測距離によって算出されたのに過ぎないが、1枚の図幅に20個ほどの標準点を設定したのは、比較的正確さを期したためである。

一部の等高線は図幅間の連結が不自然であるが、これは測量士の統一した作業がおろそかだったからであろう(京釜鉄道株式会社、1903)。目測の場合には以下のような経験的基準に依存することが多かった。

4000m 高い場所から眺めたとき、人群れの動きが肉眼で確認できる。

- 2200m 人、馬、牛が黒点として見える。
- 1500m 人は黒い線として見え、金属物種類から反射する光を見ることができる
- 900m 行進する部隊を確認できる。
- 800m 手足の動き、ボタン、バックルを識別できる。
- 700m 馬や牛の脚の動き、隊列の数を推し量れる。
- 450m 頭、帽子、輪郭を区別できる。
- 400m 馬の色、人の手と足を区別できる。
- 250m 顔の輪郭を見ることができる。
- 150m ボタンの区分ができる。
- 100m 目と口を見分けられる。

以上で羅列した基準は、清明な天気の場合の条件で、視力が悪くない普通の人の視力の場合のみの判断基準となる。状況によっては実際より遠く見えたり近く見えたりすることもある。まず、実際より近く見える場合を数え上げると次のとおりである。

- ① 空が晴れて、特に暴雨が通った直後のように空気がきれいな時。
- ② 測量者が太陽を後ろに、太陽光線に照らされている物体を見る時。
- ③ 目測しようとする対象物が、その背後の景色またはある物体との補色関係から鮮明に浮き上がった時。
- ④ 目標物がほかの物体と離れており、混在せずに独立して位置している時。
- ⑤ 谷または平坦地を跨っている場合、目標物より近い前側の物体が蔽われて見えない時。
- ⑥ ある物体を上向きまたは下向きで見る時などがある。

これとは違って実際より遠く見える場合は次のとおりである。

- ① 天候が猛暑である時。
- ② 太陽を向かった姿勢で物体を見る時。
- ③ 目標物が背景などによって薄く見える時。
- ④ 曇りや霧の日、日没時、森林の中または細長い谷底に立っている時。
- ⑤ 低い姿勢である物体を眺める時などである。

このような場合は目測が不正確であるため、測量士らは実際に野外に出て訓練を繰り返し、経験的に熟知した。

4. 日帝の成立と陸軍参謀本部

(1) 日帝の成立

19世紀末頃から、欧米のような先進国家では資本主義経済による工業生産の発達で、巨大な企業の出現がみられた。これら先進工業国は原料と製品の市場を確保するために、海外に目を向けた。帝国主義は、軍事力をもとに海外に資本を投資し、現地住民の労働力を搾取して鉄道・鉱山・工場を経営しながら登場した。アフリカに加えアジアに対する諸帝国主義国家の侵略政策が露骨化されるなか、韓半島をめぐる列強国の動きは緊張した。

日本の幕府はロシアの南進政策が実行されると、北海道を死守する方針を固め、外国船打佛令まで下しながら、鎖国政策を固守した。しかし1853年と1854年にアメリカ艦隊の威力に屈伏し、日米和親条約と1858年の日米修交通商条約を結ぶに至った。それを契機にロシア・イギリス・フランス等とも通商条約を締結し200年間続いてきた鎖国政策は終止された。開国後の日本国内政策は政治・経済的に混乱に陥った。幕府の開国政策に反対する人たちの外国人追放の動きは、若い武士階級と地方有志らに広がった。しかし、アメリカ・イギリス・フランス・オランダの4か国連合艦隊の攻撃を受けた日本は、武力で外の勢力に対抗することは不可能だと判断し、富国強兵策の基盤をもとに近代化を促進すべく方針を変えた。

このような政策変化に反対するグループらの粘り強い抵抗で幕府の権威は失墜した。さらに、政治的混乱は言うまでもなく経済も破綻の窮地に追い込まれた。状況の悪化に連れ15代将軍徳川慶喜は、1867年に政権を朝廷に奉還するに至った。朝廷は260年間続いてきた江戸幕府を廃止し、新しい政府を建てた。新たに建てられた新政府は、王政復古を各国に告示するとともに天皇中心の中央政府体系を整えた。

1868年、江戸を東京と改称し、年号を明治に変えた。1869年には首都を京都から東京に移した。新政府は各種の制度を統合し中央集権化を促進するとともに、旧社会組織を改革し、近代国家としての発展

を計るいわゆる明治維新を断行した。中央政府は地方の軍隊を解散させ、国民皆兵制を採択するとともに徴兵令を発動し、富国強兵の路線を歩き始めた。1873年征韓論の台頭以来、1889年の大日本帝国憲法の制定、1890年の帝国議会開院に至る過程を通じて、日本は軍国主義と帝国主義の基盤を築いていった。

(2) 陸軍参謀本部の設立と地図製作

軍用秘図は日本の陸軍参謀本部が発行した地図なので、これらの刊行経緯をみる為には、参謀本部の組織経緯と地図作成に関する考察が必要である。日帝下での参謀組織の結成は1871年7月のいわゆる「大政治改革」の一環から始動された。この時、日本は工部省内に測量司を設置し、イギリスの測量技師を招聘して測量事業を開始した。一方、兵部省内には参謀局が設置され間諜隊が組織されたが、実はこれが陸地測量部の始まりだと見なされる(高木菊三郎、1931)。参謀局の任務は、機密探知を始め、諜報活動、地図製作および地理調査だった(陸地測量部、1921)。

1873年3月には、兵部省が陸軍省と海軍省に分離されるに従って陸軍省の条例が改定され、参謀組織は「第6局」と改称され地図測量・絵画彫刻・兵士兵家地誌の収集を主な任務にされた。一方、工部省に属していた測量司は1874年に内務省に移管され地理局と改称した。日本の国内情勢が混乱するにつれ陸軍は第6局を廃止し、参謀局の名称で復活させ、その業務と権限を拡大させた。参謀局の下部組織として第5[1]課に地図政誌課を設けた[1884年6月]。この部署は、日本国内はもちろんカムチャツカ半島・サハリン・満州・シベリア・韓半島・中国沿海州を監視し、南洋群島まで諜報対象にした。

日本が台湾に出兵して[1874年]から4年後、韓半島に対する日帝の侵略欲が露骨化した1878年12月、陸軍省は参謀局を廃止し、参謀本部を設置し地図課と測量課を設けた。それは、参謀局に既存する組織だけでは、隣国に対する諜報活動を十分に遂行できないからであった。参謀本部の設立で参謀組織の改編はもちろん、その機能や役割も大幅に拡大した。参謀本部の下部組織として関東局と関西局を置き、前者はサハリン・満州・カムチャツカ半島・シベリア

を諜報業務の対象とし、後者は韓半島及び中国の沿海州をその対象にした。その翌年の1879年には満州と韓半島の管轄が変わって、韓国における諜報活動は関東局の管轄に引き渡された。このような経緯から、1878年をよく日帝参謀組織の確立期と呼ぶ(参謀本部、1898)。

東京湾付近で最初の三角測量を実施した陸軍省は、ドイツに留学中だった田坂大尉[虎之助、1850-1933年、のち少将]を帰国させ、ドイツ式の三角測量を始めた。内務省と陸軍省に二元化した地図製作業務を一元化するために、1884年大政官布告により測量事業を陸軍省に移管するに従って、内務省の地理局は陸軍省参謀本部所属に編入された。1885年には箱根地方の2万分の1地図が、日本最初の正式地形図として刊行された。1888年には、陸地測量部条例が公布され、従来では参謀本部傘下の測量局を参謀本部長直属の独立機関に格上げした。これは日本軍部が地図製作の重要性を認識していた事実となる。

5. 諜報体系の確立と間諜隊の活躍

(1) 諜報体系の確立

日帝は韓国との外交・軍事的関係が緊張するにつれ、言わば対朝鮮処理方針を決定し、1872年9月に外務省の花房義質[1842-1917]を韓国に派遣した(日本史年表、1991)。彼の随行員であった北村重頼中佐と別府晋介少佐は、陸軍参謀局の支持を受け諜報活動を開始した。当時、韓国内での外国人活動は禁止されていたため、彼らは韓国人に偽装して三南地方を偵察し、帰国後に結果報告をした。この二人の将校による諜報活動が、文献上で現われた最初の諜報活動である(村上勝彦、1991)。

諜報将校らは韓国だけではなく、満州にも池上四郎少佐ほか2名が派遣され、地理・風俗・政治・経済・軍事などの調査を命令された。彼らは商人に偽装し遼東地方一帯を踏査しながら諜報を収集した。特に彼らが注目したのは、遼河の結氷と解氷状態を綿密に調査することであった。

参謀組織が「第6局」に改称された1873年には、鳥尾小彌太少将[1847-1905年、のち中将]が主張した「長白山国防第1線説」に即して、美代清元中尉を清国に派遣した。その翌年にも、参謀局は大原里賢大尉を

始め 8 名の諜報員を清国に派遣し、隣国に対する本格的な諜報活動を開始した。そして海津三雄少尉は 1877 年開港場の交渉の際、韓国に派遣される花房代理公使に随行しながら、韓半島の状況探索を命令された。参謀本部の歴史草案には、これが韓国に対する諜報活動命令の始まりと記載されている。海津少尉の韓国滞在期間が予想より長くなったのは、漢城・釜山・元山等の要衝地に密派され諜報収集に急いでいたからである。1878 年には数回を掛けて、日本海軍の軍艦天城号が韓半島各地の海岸を回り、開港場を物色した。

その当時、関東局は堀江芳介大佐[1845-1902 年、のち少将]が指揮し、関西局は桂太郎中佐[1847-1913 年、のち大将、陸軍大臣、首相]が担当していた。その中で桂は参謀組織の発祥地であるドイツに留学し、約 6 年間にわたって参謀組織を勉強した参謀活動の中心人物だった。翌年の 1879 年 4 月、花房代理公使は開港場交渉のため、再びソウルに来て 8 月末に協定書に調印した。その際、上で名前を挙げた海津少尉は韓国に派遣され、兵要地誌、即ち軍隊が必要とする地理書の資料収集活動を遂行していた。彼は情報収集に加え地図製作にも熱を上げた。海津の諜報活動の一部は日本の内閣文庫に所蔵されている、漢城から済物浦までの「自漢城至済物浦略図」を通じて知ることができる。

参謀本部が設立された後、隣国に対する諜報体系を確立するために、1880 年 2 月には語学留学生 10 名が韓国に派遣された。続いて 11 月には、堀本禮藏中尉がソウルに派遣され研修生を指揮監督した。参謀本部は韓半島での諜報活動のためには、韓国語の習得が必要であると思ったからである。これは海津が活動舞台をソウルから釜山に移した後である。

堀本は 1882 年に発生した壬午軍乱の渦中で死亡した。彼の空席を埋めるために参謀本部は水野弘毅中尉、松岡利治中尉らを韓国に派遣した。参謀本部は彼ら将校を韓国政府の官吏に採用されるように工作を広げた。官吏の身分を取得すれば、思いのままに全国を歩き回りながら情報収集ができるからであった。しかしその工作は失敗に終わった。

1882 年 8 月、花房公使は諜報活動を強化するために、瀬戸重雄大尉、伊藤裕義中尉、磯林真三中尉らは将校 2 名の関西局要員を帯同してソウルに到着した。彼らは韓国内の情勢が緊張すると、清国との軍事的衝突が予想されるので、日本軍を動員しソウルと平壤を占領すべきであるとする報告書を参謀本部に上申した。その頃、韓国に派遣された軍隊は、警部電信保護名目のソウルの 2 中隊、釜山の 1 中隊、元山の 1 中隊にすぎなかった。200~300 名程度の兵士で清国と戦うことや、都市を占領することは不可能であったはずである。済物浦条約と韓日守護条約

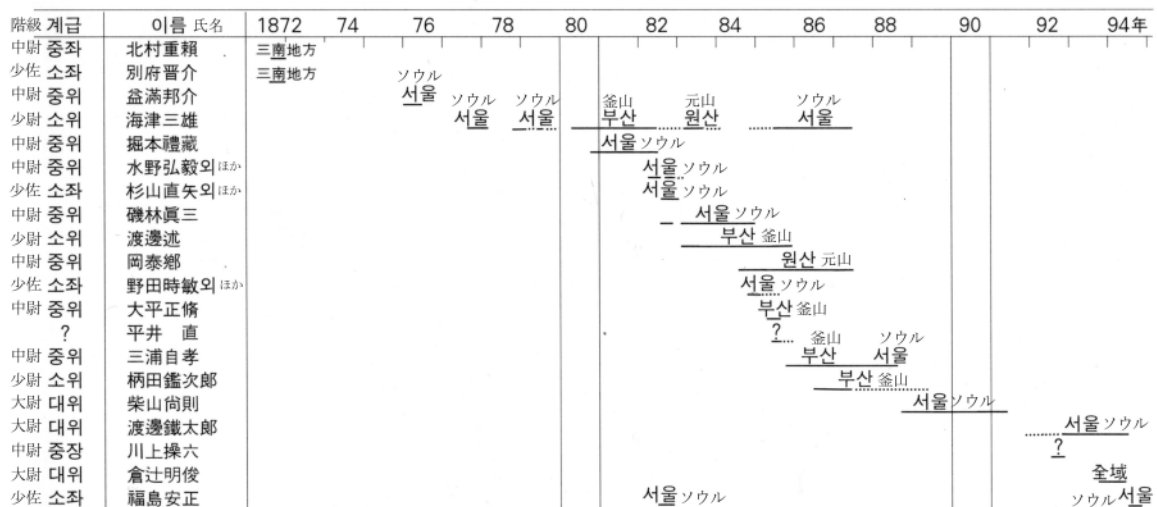


그림 2. 참모본부 장교의 한국 체재기간 및 활동지역
 図 2. 参謀本部将校の韓国滞在期間および活動地域

が、日帝によって強圧的に締結されるによって、派遣将校たちの諜報活動は一層しやすくなった。即ち、条約の締結される以前には許可されていなかった韓半島の旅行が自由になったのはもちろん、旅券所持者は地方官が護衛してくれるとの規定まで伴う外交特権が付与された。これらの事実は、要するに地図測量事業も容易になったことを意味する。

(2) 間諜隊の活躍

韓半島で暗躍する間諜隊は、何よりも地図作成が最も重要な任務だった。海津は韓半島の道路地図を作成し、1882年からソウルで諜報活動をしていた水野・松岡たちは現地踏査と目測で縮尺4万分の1の「朝鮮京城図」を完成した。壬午軍乱直後には実際測量が可能になり、1883年には縮尺1万分の1の「朝鮮国京城之略図」と縮尺2万分の1の「漢城近傍図」が作成された。これら地図の縮尺からみて大変詳細な地図であることが分かる。また、壬午軍乱直後に短期間の派遣であった瀬戸口大尉を含む将校団は、日本へ帰任、日本軍のソウル侵入の方策を提出した。

将校団の中で磯林中尉は、公使館職員資格で再びソウルに派遣された。渡辺述少尉は釜山に派遣され、釜山で暗躍していた海津は元山へ活動舞台を移した。その当時の主な諜報活動は、ソウルを始めとする各開港場に根拠地をおいて、磯林・渡辺・海津の主導の下で成り立っていたと推定できる。彼らは、1882年12月から国内旅行に外交特権が付与されると、場所を移しながら諜報活動を展開する計画を建てた。しかしそのような計画は、韓国百姓たちの反発と我が政府の抵抗で暗礁に乗り上げ、1883年3月に磯林だけが実行に移すことができた。日帝の測量侵略に対する我が民族の抵抗に関しては後述する。

元山に駐在していた海津少尉が帰国することによって、1884年5月に彼の後任として岡泰郷中尉が赴任した。しかし、彼らに付与された任務が従来とは違っていたと推定できる。何故ならば1883年からは、軍事情報の探知に専念しろとの命令が参謀本部から下達されたからである。その当時から、韓半島に派遣された諜報員の成果としては、参謀本部測量局にて1884年10月～1885年1月に、石版印刷で発行した縮尺10万分の1の「漢城近傍之図」、「釜山近傍之

図」、「元山近傍之図」が数えられる。ここで漢城近傍とはソウルを始め楊州・水原府・江華府・仁川府・南陽府で、釜山近傍とは釜山浦を始め蔚山府および密陽府・靈山県・漆原県・鎮海県と統営で、元山近傍とは元山港をはじめ松田港・淮陽府・永興府および高原郡・陽徳県を含む範囲である。

磯林の後任として情報業務の最古参となった海津は、1885年2月に再びソウルへ活動舞台を移した。渡辺の後任として釜山に赴任した大平正脩中尉は、数ヶ月で疾病のため死亡した。結局、その年の8月に三浦自孝中尉がその後を継いだ。参謀本部から命令を受けた3名の派遣将校は、1886年の春から全国各地を廻りながら情報を収集した。三浦と岡は語学研修生出身である軍属2名を帯同した。しかし1887年春から三浦が海津の後を継いでソウルの駐在将校となり、釜山では柄田鑑次郎少尉が任命され、彼らは各自が全国を歩き回りながら情報収集に没頭した。特に、三浦と柄田はそれぞれソウルと釜山を出発し、全国を調査した。彼らの2年間に渡った諜報活動は、主に西海岸の精密調査に焦点が置かれた。

1887年まで行われた参謀本部の韓国に対する諜報活動は、軍事用地理書である『朝鮮地誌略』の刊行準備と地図製作に目的があった。その後も、諜報活動は柴山尚則大尉、渡辺鉄太郎大尉、福島安正少佐[1852-1919年、のち大将]に継がれ日清戦争に至るまで継続された。その他の韓国駐在将校は未だに明らかにされていない(村上勝彦、1981)。

参謀本部次長である川上操六中将[1848-1899年、のち大将、参謀総長]が1892年5月から韓半島と清国の視察に出掛けた。彼の指示に従って、駐釜山日本総領事は1893年8月に、鉄道局の専門技師で構成された測量班に京釜線鉄道敷設の予定コースの測量を命じた。例え、1882年から日本人の旅行が自由になったとは言え、測量は公開的に行えなかった。

その当時、専門技師だった仙谷貢は、他の国をこっそりと測量することは良心が許さないと拒否したことがある。良心的な日本青年もいたが、大勢はそうでなかった。

倉辻明俊は2名の随行員を連れて、1893年9月から8ヶ月間にわたる長期間の諜報活動に入った。彼の任務は日清戦争に備えた最後の準備作戦であった

と見られる。彼ら一行はソウルを出発し、開城と平壤を通過して義州に入ってから、鴨緑江を渡って満州の九連城に着いた。このコースは、日清戦争が勃発時の日本軍第1陣の進攻コースと一致する。彼らは再び義州に戻り、鴨緑江を遡って渭原、満浦を経由し満州に入り、広開土王碑を見学してから韓半島に戻った。彼らの行跡は、参謀本部が陵碑に対する関心が高かったことを反映するものと見られる。そしてその外の地域における偵察は、1875年に陸軍参謀本部が作成した地図などを修正する目的で行われた

のだろう。その証拠として、倉辻を補助した2名の随員が専門的な測量官であったことと、参謀本部陸地測量部が外国における地図作成を重視した時期と一致するからである。

彼らは諜報活動を中断せず、再び鴨緑江を遡って巫徳嶺を越え咸境道に入り、白頭山と北雪嶺を越えようと謀ったが暴雪のため断念し、南雪嶺を越え吉州と鏡城を通過して東海岸に着いた。一行はそこでも諜報活動を中断せず、今回は内陸に入り茂山から豆満江に沿って、慶興を経由し元山まで南下した。こ

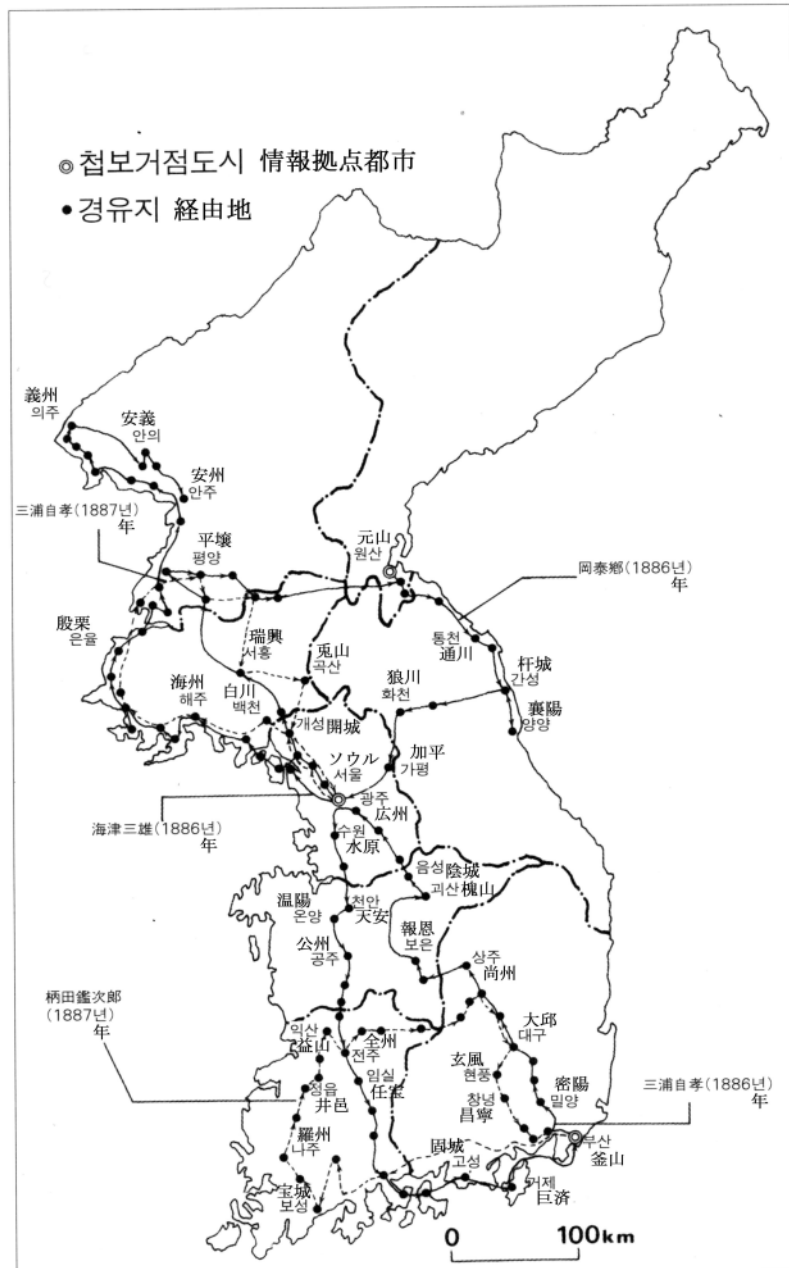


図3. 参謀本部将校の軍事偵察ルート(1886~1887年)
그림 3. 참모본부 장교의 군사정찰루트(1886~1887년)

のような諜報経路は、まさに韓国と満州間の国境を察するためと見られる。ソウルに戻った倉辻一行は、仁川を經由し京畿道・忠清道・全羅道・慶尚道を巡回してから釜山に到着した。彼らは再び、東海岸一帯を偵察する目的で東海岸に沿って元山へ向かった。

一方、公使館の渡辺は1894年4月にソウルを出発し、元山経由でウラジオストクに潜入して諜報活動に入った。彼はまた巨済島—釜山—ソウル等のコースを回りながら諜報活動を行った。伊知地幸介少佐は当年5月に東学の乱〔甲午農民戦争〕の実状を調査するために派遣され、また公使館の武官の主管下に9名の測量士が地図作成のための資料収集を目的として動員された。1894年は、つまり軍用秘図の測量が始まった時期に該当する。このような一連の諜報作戦は、戦争の準備を急ぐ日帝の意図を顕にしたものでもある。

これまで、私は参謀本部間諜隊の偵察ルートを追跡してみた。これで私は、軍用秘図で主要拠点都市と咸鏡道・江原道などの一部が抜け落ちた理由をある程度分かるようになった。即ち、主要都市は詳細地図で代替されており、咸鏡道と平安道の一部地域は間諜隊の調査によって、別途に地図が用意されていたことを意味すると推定できる。しかし、江原道は戦略的に不要不急な所であって、間諜隊の偵察ルートからも除外されていることから、後で測量する意図であったことが窺える。

5. 測量侵略に対する韓国民の抵抗

(1) 測量侵略の沿革

19世紀末に執行された日本の測量侵略に関する研究は、資料の制約で活発ではなかったが、全くなかったわけではない(イ・ジンホ、1989)。日本の測量侵略は外務省と軍部によって主導された。軍部の場合、陸軍は参謀本部が主導し、海軍は水路局が中心となっていた。内陸と海岸地方の測量が陸軍と海軍の役割分担によって推進されていたと考えられる。

日本は1875年9月、海軍艦艇雲揚号をわが国の近海へ派遣し航路測量を謀った。雲揚号が江華島沿岸に接近すると、草芝鎮の警備をしていた守備兵が銃を発砲した。彼らは待ったかのように応戦しながら草芝鎮に上陸し、砲台を破壊し守備兵を殺害した。

これが有名な雲揚号事件である。この時期までは、日本軍部はまだ江華島の軍事情報をあまり持っていなかったようである。このようにして、1888年11月に陸軍参謀本部が発刊した『朝鮮地誌略』によれば、江華部の邑治項目のうち、城壁の高さ・厚さ・長さなどが比較的詳細に記録されており、東門と南門の間の警備状況が把握されていたことが分かる。

雲揚号事件は日本外務省と軍部測の指示によって、海路調査という名目のもと混乱を起こさせ、門戸開放を強要する計略で執行された故意的な挑発であった。この事件を意図的に起こした日本は朝鮮が清国の属国という理由で、まず清国にその責任を問わせた。ヨーロッパ列強の侵略に苦しんでいた清国は問題が大きくなることを憂慮し、閔氏政権に対し条約締結に応じるよう勧告した。日本は1876年に軍艦2艘、輸送船3艘に約400人の兵力を江華島甲申へ上陸させ、協商を強要した。右議政 朴珪寿を始めとする朝廷の首脳部は門戸開放の準備が整っていないと思っていたが、何よりも軍事侵略をまぬかれるため条約締結に応じた。この江華島条約は、一方的で不平等な内容の英日条約を模倣した、韓国最初の近代的国際条約である。

1876年2月26日江華島条約は、韓国側の判中樞府事 申櫨、都総府副総管 尹滋承、日本側の陸軍中将兼開拓長官、黒田清隆〔1840-1900年、のち首相〕、議官、井上馨〔1835-1915、のち外相など〕との間で締結された。この条約の第7条に、日本は朝鮮の沿海・島嶼・岩礁などを自由に測量し、海図を作成できると明記した。韓半島沿岸が航海に危険なら入らなければ良いことを、彼らは安全通商のために測量すべきであると固執したのである。ここで、私たちは雲揚号が測量を口実で軍事的侵略を行っていたという記録を再吟味する必要がある。

条約の締結時に韓国側の代表であった申櫨(1810-1889)は、刑曹・兵曹・工曹判書を経た武官であり、外交官でもあった。ソウル大学奎章閣に所蔵されている「申櫨文集」のなかの「大東方輿圖序」によると、申櫨が古山子 金正浩に資料を提供し、地図製作を依頼したという記録が見られる。誰よりも地図の重要性をよく知っている申櫨が、日本に測量を許可する内容の江華島条約第7条について、何の異議を

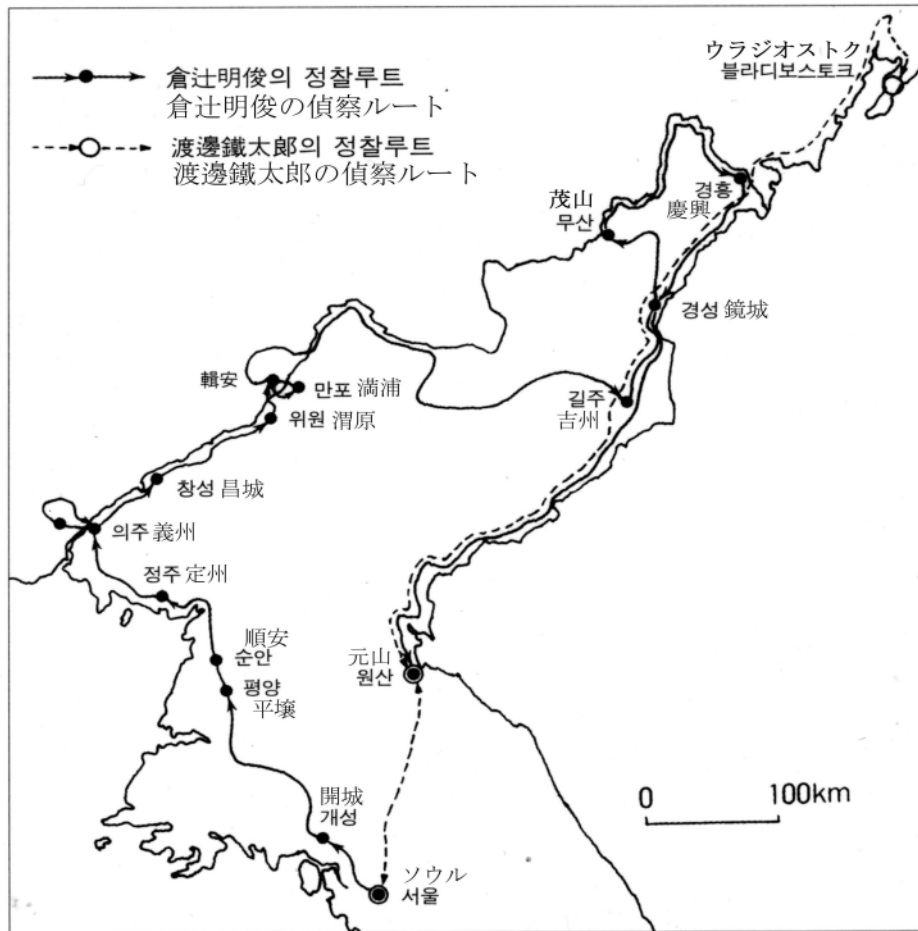


그림 4. 구라쓰지와 와타나베의 군사 정찰 루트(1893~1894년)
 図 4. 倉辻と渡邊の軍事偵察ルート (1893 ~ 1894 年)

提議しなかったことは疑わしいことであるとイ・ジンホ(1989)の研究は指摘している。結果的に、雲揚号が測量を言い立てて喧嘩を売って来て、それをきっかけに締結された条約で測量の自由が許されたことは、侵略をするために測量を先行していたことを反証するものである。

外国と締結した条約のうち測量を許可した事件はほかにもある。1883年11月26日に締結された韓徳修好条約がそれである。この条約の第8条 第4号に、朝鮮国政府は朝鮮海岸の測量に従事するドイツの海軍軍艦に対して、可能な全ての便利を提供するべきであると明示されている。イ・ジンホの研究によると、1799年から1910年まで侵略と探索のために韓半島沿岸を測量した回数は計41件に達する。この期間中、国別の測量侵略回数は日本が28回と最も多く、アメリカとイギリスが各4回、ロシアとフランスが各2回、ドイツが1回であった。多くの列強国が韓国を窺っていたということだ。その中で日本の侵略

意図が最も露骨で、多い時で229人にも達する測量隊員が大規模で出動した場合もあった。軍用秘図の測量が真最中であった1895年のことである。

韓半島に対する外国の侵略は、1799年のイギリス船舶プロビデンス号による元山の測量をはじめ、1854年のロシア海軍プチャーチン中将による東海岸の測量、1845年のイギリス船サマラン号による南海岸一帯の測量、1866年アメリカ商船[ジェネラル]シャーマン号と1867年のアメリカ軍艦ワチュセット号による大同江の測量、1891年のアメリカ軍艦による江華海峡の測量など数え切れないほど頻繁であった。しかし、日本の露骨な測量侵略は他の国とは次元を別にしたものであった。参謀本部間諜隊の活躍状況は、すでに前で紹介した通りであるが、特に駐釜山総領事 室田義文の行跡が注目を引く。彼は本国の外務大臣に、後日に必ず京釜線鉄道の建設時期が来るので、事前にコース踏査を実施する必要があると説明し、了承を求めた。鉄道局長の推薦を受け

受けた鉄道技師、河野天端は、1892年8月に測量班を組織し踏査に入った。彼らは釜山を出発し、着手から約2ヶ月を経て調査を完了した。10月には報告書と線路敷設の予定地図を完成し、外務省および参謀本部に提出した(朝鮮総督府鉄道局、1937)。

1891年、井上馨参謀が韓国視察の名目で夏に来韓して鉄道敷設問題を論議した。彼は室田釜山総領事と鉄道敷設のための測量事業について妙策を熟議した。彼らは、外務特判関種黙に会って鳥を狩猟すると騙し、しめ縄を打ち、旗を刺して置きたいと言った。多くの韓国人は彼らのずい術策に騙され、鳥狩り場と言われた場所には行かず、測量していることには気付いていなかった。関種黙が日本人は本当に鳥の狩猟をしていたのか、他の陰謀を企んでいたのかについて確認したとの記録はない。彼は兵曹判書・礼曹判書・外務大臣・度支部大臣・農商工部大臣などを歴任しており、韓日併合時には男爵称号を授与された。測量事業に親日派と協助者らが自分の意志または他意で動員されたが、参謀本部の韓国における測量事業は多くの難関に遭遇した。

参謀本部は韓国だけでなく清国にも諜報員を派遣した。しかし、彼らは直接に諜報を収集せず、現地住民を抱き込んで利用するが多かった。これらの事実は清国に比べ韓国での諜報活動が難しかったことを示唆する。1884年12月4日、甲申政変が発生すると、急遽ソウルに向かっていた磯林中尉と語学研修生3人が韓国人に殴られて死亡する事件が起こった。初代の駐ソウルの将校であった堀本に続いて、第2代目将校であった磯林が韓国人によって殺害されたことは、抗日運動史に意義をもたせるほどの事件であった。日本の不法な測量に対し、我が農民たちがどのように抵抗したかを考察してみる。

(2)韓国民の抵抗

上述したように、日帝の測量侵略に対して韓国民は座視せず抵抗した。日本で刊行された『外邦測量沿革史』には、韓国人が日本測量隊に猛烈に抵抗した報告書が記載されている。この資料はキム・イウォン教授がイ・ジンホ教授に提供するによって公開されたものである(イ・ジンホ、1989)。これによると、軍用秘図の測量が始まった1894年から朝鮮地形図

の測量が完了した1933年まで、測量犠牲者は戦死28、惨死16、傷害死1、即死14、溺死6、病死57人と計127人で、そのうち56人は韓国人の抵抗を受け殺害された。特に、軍用秘図の測量が本格化した1895年の抵抗が猛烈であった。たとえ学識のない農民にしても測量自体を侵略と思った人が多かったのである。

そのようにして、測量隊員らは測量事業の遂行と自己の身辺保護のため、変装をしなければならない程であった。彼らは、まず金正浩の大東輿地図を見て、韓半島の各地域の地勢を概略的に把握した後、葉売りに偽装し、太鼓やアコーディオンを持って番号を呼びながら目測と歩測で秘密的に測量した(イ・ジホ/ホン・シファン、1956)。地図を製作するに当たって、測量は日本人測量技術者を動員すればよかったが、地名を把握するためには必ず韓国人が必要であった。測量はこっそりできて地名は現地住民に聞く必要があったからだ。それが理由で、1880年頃には語学研修生を韓国へ派遣して韓国語を習得させたが、短期間で語学を完成できなかった。元々発音が下手な日本人にとって韓国語会話はとても難しかっただろう。

日帝の測量侵略に対する我が民族の抵抗に関する記録は日本側の記録のみが見られる。ここでは、『外邦測量沿革史』に載せられた報告書の中から、重要な事件のみを選び紹介する(イ・ジンホ、1989)。

咸興事件

軍用秘図の製作のための測量事業が本格化した1895年に、測量隊は4つの班に分けて各地へ散った。そのうち第1班は10月15日に咸鏡道元山に上陸し、守備隊長と領事に測量地の事情を訊問してから、元山北側の興源にまで隊員を配置し測量に突入した。しかし測量は彼らの思ったようには順調に行われなかった。この地方の地域住民たちは測量隊員に悪口を言い、石や棒を振り回しながら測量を妨害した。また住民たちは、日本人は出て行けという壁掲示板を官庁に張りつけたり、米穀や燃料などの値段を騰させたりして測量隊を苦しめた。さらには、郡守から農民にいたるまで日本人に米を売ることさえ拒否するようになった。

1876	明治 1	↓	[明治維新]	
	3		● 内務省イギリス人測量士招聘	
	4		● 対韓諜報活動開始	
	4		○徴兵令(国民皆兵制)実施	
	5	↑海道測量	● 東京府内 13 点三角測量	
	6		○征韓論の台頭	
	6		● 参謀組織(第 6 局)設置	
	7		● 参謀局復活	
	7	測量局	[江華島条約]	<図式の変遷>
	10	陸地測量部発足	[西南戦争]	◎明治 13 年式(フランス)
	15		● 田坂ドイツ留学	
	17		● 迅速図 仮製図製作	
	22		● 修技所発足	◎明治 18 年式(ドイツ)
	24		● 水準点設置	
	24		● 基本地形図変更(1:2 万→1:5 万)	→ 1:5 万基本図
1894	27		[日清戦争] ● 軍用秘図側図	
1897		↑	[大韓帝国の成立]	◎明治 28 年式
	32			◎明治 33 年式
1904	37		[日露戦争]	
1905			[乙巳条約]	
	41		● 統監府設立	
1910			[韓日併合]	◎明治 44 年式
	45		● 総督府設立	
1912			● 土地調査事業開始	
大正 1			● 郡面制の改定	
	13		● 日本全土基本測量完成	◎大正 6 年式

図5. 陸地測量部の年表

1895年11月5日に、陸軍参謀本部の服部直彦少佐が陸地測量部長の藤井包總[1850-1925、工兵、のち中将]に報告した内容によれば、韓国人のなかに測量隊の宿舎に火を付けようとする計画を企んでいる者がおり、危険なので一時撤退を願い出るまでに至った。測量隊は仕方なく咸興の南側にあるハクセン[鶴仙]亭という所に移動し、他の場所を測量するしかなかった。測量隊が内陸に侵入するにつれ、士民らからの妨害をより頻繁に受けた。ある地方では、測量隊が住民に地名を聞いたら「地名を知って何に使う？」

と反問しながら教えてくれなかった。時には故意的にでたら目を教えられたり、韓国語の発音を聞き間違ったりして、それを記録した事実が軍用秘図にそのまま反映されている。

そして1895年11月29日の報告書によると、駅舎や駅店に宿泊しようとしても宿舎が極めて小さく狭いので、仕方なく一般民家に宿泊するしかなかったという。しかし住民たちが拒絶するため、地方官吏の助けを借りてやっと承諾を得ることができた。地方官吏にお願いする際は測量の事実を隠したのは言う

表 1. 1895 年の日本測量隊動員現況

出発時期	測量技師	補助員*	軍人	運送夫・馬夫	計	馬
9月24日	12	57	3	19	91	3頭
10月1日	9	55	2	16	82	1
10月4日	7	37	1	11	56	1
計	28	149	6	46	229	5頭

* 太鼓を鳴らし信号を発信する鼓手

までもない。彼らは韓国人官吏に間諜行為を見ぬけられないように格別に神経を使っただろう。

大邱事件

4つの班の測量隊のうち、第4班は大邱とその周辺を測量していた。1895年12月16日に菊池和太郎大尉が陸地測量部長に報告した内容によると、11月27日の夕方頃、測図手の勝畑孝次郎は河陽から多富へ行くために大邱に泊まることにした。夕食をしながら同僚の測図手と朝鮮酒を5~6合飲んだ様であった。夜10時頃、馬夫だった海川音松が測量班長の泊まっている寝室に息を切らしながら走って来て急告した。西門内で2人の測図手と通訳ら測量隊員数人が韓国人に殴られ、命が危ないとのことだった。測量班長はすぐに運送夫1名を呼んで、兵参府と守備隊長に急いで報告させると同時に、海川を帯同して事件現場に着いた。

そこでは白衣と黒い服を着た住民約70~80人が、測図手を含む隊員たちを囲んで喧嘩をしている真最中だった。班長は群れのなかに飛び込み、大声を出し、手を振り回しながら喧嘩を止めさせようとした。すると怒った住民たちは激しい声で叫びながら、彼を囲んで拳を振り上げ押し倒した。その渦中に1人が鋭利な鉄棒を回し突き刺そうとし、班長の命は窮地に陥った。危険を感じた彼は、最後の手段として隠していた刀を抜いて振り回した。刀に刺された韓国人は血を流しながら退いた。他の所でも喧嘩の声が聞こえ、班長はそこに駆け込んだ。途中で銃声が聞こえてきた。現場に着いてみると、韓国人はもう去って行き、勝畑は自分の命を守るため威嚇射撃をしたと説明した。班長は勝手に武器を露出した彼について厳しく問詰めた。ことを誤ると測量隊のスパイ行為が綻露される危険性があったからだ。

測量班長が一行を連れて帰ろうとすると、韓国人たちがまた集まり掛かってくる勢いをみせた。ちょうど喧嘩の起こった場所が觀察使府と近かったので、治安要請をするため府門の中へ走り込んだ。すると韓国人らも追い掛けてきて進路を防いだ。やっと觀察使の李重夏と面談した班長は、暴行事件の再発防止を要請すると同時に、自分を鉄棒で殴った巡査兵の訓戒を求めた。觀察使は班長に遺憾の意を表わし、ことの始末を聞いた。事件は2人の測図手が夜8時頃、大邱市内を散策中西門内に入って、燈が付いている家に「漏椽」があり、休憩しようと腰をかけ話をしていると、そこへ家主が戻って来てぶつかり合いが起こったのである。他人の家で許可もなく、くだらない事をしきりに喋りまくった日本人の無礼さに大邱の百姓たちが憤慨した事件であった。

堤川事件

1896年2月15日、二組の測量隊が丹陽一帯を測量するために、聞慶を出発し丹陽で交流することになっていた。1組は3人、2組は2人で構成されていた。その日の午後、嘉興地域守備隊長の三宅大尉から聞慶地域守備隊長の長岡という下士官〔軍曹〕に、丹陽へ行くのはとても危険なので中止しろとの電報が飛び込んだ。そこで測量手の池田は急いで連絡員を行かせ、二組の丹陽行きを中止させたが、第2組へは連絡が届かなかった。第1組に属する3人は連絡員に会えて無事に戻ってきたが、第2組の植田鹿太郎と小川茂幾は連絡を受けてなかったのも戻って来なかった。しかし、第2組の随行員として雇われた韓国人が2月17日の午後2時頃に戻ってきた。

彼の報告によると、2月16日の午後2時頃に聞慶から80里離れた水山という山の中で測量作業をしている際、この事実を知って駆け込んで来た現地住

民 10 数人が測量隊を囲み込んだ。日本人と韓国人で構成された 3 人の測量隊は激しく抵抗しながら、石を投げってくる住民に向け隠していた拳銃を発砲した。2 人の日本人測図手が脱出路を作るために発砲したのであった。しかし銃弾がなくなり衆寡揃せず生け捕りとなり、水山村という村に連れて行かれた。植田測図手は韓国人の雇人に「小川測図手と私は日本人だから間違いなく殺される、あなただけでもここを脱出して聞慶へ逃げなさい」と言った。実は、その当時の日本人は韓国語もまともに駆使できなかったうえ、服装が異なっており直ぐに目立っていた。結局、測図手は逃走を放棄し韓国人の雇人だけがやっと脱走に成功した。その韓国人は大邱出身のチャン・ドリョンという人で何文かのお金を買収され雇われた人であった。

2 月 18 日午前 9 時、聞慶守備隊は若干の負傷を負って脱出したチャン・ドリョンの報告を受け、5 人の兵士と 7 人の韓国人の雇用人を水山へ派遣した。偵察から戻って来た兵士らは、2 月 29 日午前 9 時に 2 人の測図手が堤川へ連行されたことを守備隊長に報告した。水山村一帯の測量に憤慨した住民が多かったことから、それ以上の偵察は不可能だった。偵察兵は帰隊する途中で結局住民たちに見つけられてしまった。彼らは交戦のすえ 30 数人の我が同胞を射殺し、かろうじて聞慶守備隊に戻った。怒った住民たちは武装した日本兵士らに素手と石で抵抗した。その午後、偵察兵と一緒に動員された韓国人の雇用人とともに戻ってきて、水山村で入手した情報を報告した。植田と小川は結局、チェンブン嶺 [チェツチェン] へ連れて行かれ殺された。

以上の事実は、1896 年 3 月 3 日に菊池大尉が陸地測量部長の藤井大佐に報告した内容の中に記録されている事件である。

驪州事件

1896 年 2 月に、測図手であった米谷豊吉と近藤卓爾が測量作業中に韓国人に殺される事件が驪州付近で発生した。この事件は鳥越民吉が上部に報告した内容であるが、彼らは何の理由で殺されたかに付いての言及がなく、ただ死体を捜しに行ったとの報告だけが『外邦測量沿革史』に記録されている。筆

者が推測するには、彼らは隠密に測量をしている途中に住民たちに見つかってしまい、殴り殺されたようである。

驪州攻略に出た日本兵士らは川寧という所に泊まっていた時、偵察兵を送って状況を偵察させた。偵察兵は日本兵に抱き込まれた現地住民であった。彼は驪州に潜入する際、村の人たちに日本軍の手先であることが発覚され逮捕された。彼は斧で威嚇する住民たちの訊問にも告白しなかった。彼は驪州出身で、この村に多数の親戚と親友があったため彼らの弁護に助けられ、そこを抜け出すことができた。当時、驪州には測量を妨害する組織的な抵抗はなかったが、住民の大部分が日本人と親衛隊兵士に対して良くない感情を抱いていた。住民たちは日本人に会うと悪口を言ったり暴行を加えたりした。

川寧に泊まっていた [朝鮮] 親衛隊が驪州に移った。利川守備隊長の安岡特務曹長は、測量中に失踪した上記 2 人の測図手に対する訊問調査を開始した。住民たちの証言によれば、彼らは殺害された後に漢江の氷の上に捨てられ、春に解氷とともに河に流されたとのことであった。

親衛隊が利川に滞在する時のことである。日本軍は近隣住民の本心を見抜くために、2~3 人の兵士を村の住民に変装させ潜入させた。言うまでもなく、彼らには万が一の事態に備え拳銃を携帯させた。彼らは日本人を襲撃しようと嘘の扇動をしたところ、皆これに応じ、多数を先導することは容易ということであった。密偵の中には 1 人の韓国人の雇用人が混じっていた。1896 年 2 月 5 日の朝、驪州へ派遣された電信監視兵 4 人が村に到着すると現地住民の襲撃を受けた。彼らは直ぐに応戦したが、事態が不利になると所持品を捨て逃走した。彼らはその日の午後 7 時頃にやっと利川に戻り事件の内容を報告した。

その翌日、通訳 [通辨] として雇われていたものが、かろうじて脱出して来て、怒り切った住民数百人が日本人宿舎を包囲したと報告した。その宿舎には測図手 2 人、電信工夫 4 人、日本人商人 1 人が泊まっていた。通訳は韓国人であったお陰で、民家に隠れてから家主の助けでやっと脱出することができたのだ。

以上で紹介した事件以外にも、日帝の測量侵略に

対する我が民族の抵抗記録は東萊・昌源・靈光事件などがあり、最も知られた事実としては、白凡 金九先生[1876-1949年、韓国の独立運動家、1940年に大韓民国臨時政府主席に就任]が1896年2月に黄海道安岳チハポで、韓国人に偽装していた土田壤亮中尉を殺した事件である(ユン・ピョンソグ、1995)。参謀本部が韓国人の抵抗をどれほど恐れていたかは彼らの事件から見る事ができる。参謀本部陸地測量部は1895年、韓半島に派遣された測量隊員たちに以下のような訓令を下した。

1. 今回の測量事業は、公然と実施できない性質のものなので極秘に測量するべきであり、測量班員以外は誰を問わず測量事実を一切口外してはいけない。
2. 測量の途中もし韓国人に発覚されたら、個人的な営利目的で行ったことであると虚偽の自白をするべきである。かりそめにも指揮系統の幹部の名前はもちろん陸軍参謀本部とは一切関係のないことにすべきである。秘密を守るためには、証拠となりうる書類はもちろん陸地測量部または測量との文字が書かれた装備は絶対に携帯してはいけない。
3. 韓国に滞在中、韓国人と論争または抗争などを決して行ってはいけない。もし自身を暴行しようとする者に出会った場合は、逃走することを最優先する。
4. 諜報(測量)行為を隠蔽するためには韓服を着て偽装することもかまわない。

以上の訓令内容を見ても、参謀本部がいかに測量作業を隠蔽するために注意を払っていたかが予想できる。しかし、ここで見逃してはならないのは、測量隊が行く所で現地の官吏たちが郡守の指示に従って便宜を提供したことだ。このような事実は、上述した閑種黙の逸話や咸興事件などからも見ることができる。百姓は測量侵略に抵抗したのに対し、官庁は庇護したのである。

我が国の朝廷は、国内に入って来た日本人たちが何をしているのかに対し監視をおろそかにし、測量の事実を認知していたとしても、その目的が何であったかを調査もしなかったようである。1896年3月

24日に王族だった李準英が陸地測量部を訪ね、製図作業を参観したとの記録からみて(陸地測量部、1921、P.133)、当時、朝廷では測量侵略がどのような結果を招くか、はっきり認識しなかったようである。測量事実を知っていたとしたら、日本政府に対し抗議するのはもちろん、我が朝廷も測量の必要性を認識し、すぐに地図製作に着手すべきであった。今日を生きる我々は、日帝の測量侵略史を読みながら切ない気持ちを隠せない。

7. 結語

従来、日帝が1917年を前後として製作した5万の1地形図が我が国の最初の近代的な地図とされてきた。これは実は第3次地形図である。しかし、19世紀末に日帝の軍事情報機関である参謀本部によって作られた事実が、私が日本とアメリカで入手した地形図から確認された。この地形図の公開用には朝鮮略図、保存用には軍事機密図と記載されているが、筆者はこれを軍用秘図と呼ぶことにした。何故ならば、この地形図は軍事用として隠密に測量された地図だからである。

軍用秘図が測量された期間は、1894～1906年までで約12年間が所要された。私がみた地図が、目測で迅速に製作された目測迅速図だとしても、その測量期間があまりにも短いことに注目して詳細な内幕を追跡してみた。その結果、地図作成を主管した日帝参謀本部は1872年から諜報活動を開始し、主要部の測量事業に突入した。1876年に締結された江華島条約により、日本は韓半島の沿海・都市・暗礁などを測量し、海図を作成できる権利を強要した。しかし、その条約のどこにおいても韓半島の内陸を測量できる権利は付与されていなかった。

1889年、参謀本部内に陸地測量部が発足し、測量技術者を養成する修技所も設置され、図式を整備するなど軍用秘図の製作準備は日帝参謀本部の意図のままに進行した。1894年から始まった測量事業には、200～300人の参謀本部要員で構成された間諜隊と50～60人の韓国人で構成された補助員らが動員された。測量隊は測量事実を隠蔽するために様々な偽装術を使ったが、全国各地で現地住民の激しい抵抗を受け、相互に多くの死傷者を出した。

軍用秘図には発行年度が1911年と記載されているが、当然表記されるべき測図年度が削除されている。1910年、韓日併合が締結された年に、臨時公開の直前になって参謀本部が韓国に対する測量侵略を隠蔽するため、故意に原版から削除したものである。この事実は筆者が1991年と1994年に日本国会図書館とアメリカClark大学図書館で入手した、445図葉の公開用地図と23図葉の保存用地図から確認された。日帝は参謀組織が設置されるにつれ、韓国に対する諜報活動を開始し、地図製作の基礎を築き上げ、1894年から実際的な測量作業に突入したのであった。結局、日帝は約20年間の事前工作作業を終え、12年にわたって測量事業を秘密に進めたことになる。日帝参謀本部が主導した一連の工作は、全てが韓日併合以前に執行されたものである。全て植民地経営の準備段階として行われた諜報活動と測量侵略は隣国に対する主権侵害であり、国際法違反であることは参謀本部も自ら認知していた。

最後に、本地形図の公開で我が国の地名・歴史・言語などを研究するに当たって役立つことはもちろん、国土の景観復元、即ち開発前の処女時代の姿に関心をもつ人々の景観研究にも役に立てることを期待する。

参考文献

国立建設研究所 1972. 『韓国地圖小史』.
 キム-イウォン[金儀遠]1983. 『韓國國土開発史研究』
 大学図書.
 キム-ズファン・ガン-ヨンボグ 1990. 『地圖学』新羅
 出版社
 ナム-ヨンウ[南榮佑]1992. 「日本参謀本部間諜隊に
 よる兵要朝鮮地誌および韓国近代地圖の作成過
 程」. 文化歴史地理, 4: 77-96.
 ナム-ヨンウ[南榮佑]1995. 「日帝参謀本部の間諜隊
 による韓国近代地圖の作成過程」殉国, 49: 10-21.
 ユン-ピョンソグ 1995. 『白凡日誌』集文堂.
 イ-ジホ・ホン-シファン 1956. 『地圖の研究』ウルユ
 文化社.
 イ-ジンホ[李鎮昊]1989. 『大韓帝國地籍および測量
 史』土地.
 イ-ジンホ[李鎮昊]1993. 「日帝の韓半島測量侵略」ヨ

ントサラン, 創刊号: 147-183.
 高木菊三郎 1931. 『日本地圖測量小史』古今書院. 東
 京.
 光岡雅彦 1982. 『韓国古地圖の迷』学生社.
 東京京釜鐵道株式会社 1903. 『韓國京城全圖』京城.
 京城居民團役所 1912. 『京城發達史』日韓印刷株式
 会社. 京城.
 稲葉正夫 1974. 『現代史資料 37 大本營』みすず書房.
 東京.
 櫻井義之 1979. 『朝鮮研究文献誌: 明治大正編』龍
 溪書舎. 東京.
 歴史学研究会編 1991. 『新版日本史年表』岩波書店.
 東京.
 陸地測量部編 1921. 『陸地測量部沿革誌: 正篇』
 日本地圖資料協会編 1988. 『古地圖研究』原書房. 東
 京.
 [朝鮮鐵道史編纂委員会]1937. 『朝鮮鐵道史、第1
 卷』朝鮮總督府鐵道局.
 中野尊正 1966. 「日本の地圖学100年のあゆみ」地圖,
 14: 1-6.
 中野尊正 1967. 「日本の近代化(明治以後)」[中野尊
 正編]『地圖学』朝倉書店. 東京.
 織田武雄 1974. 『地圖の歴史』講談社. 東京.
 参謀本部編 1888. 『参謀沿革誌第一号』.
 参謀本部編 1921. 『参謀沿革誌第二号』
 清水靖夫 1986. 『日本統治機關政策にかかる朝鮮半
 島地形図の概要: 朝鮮地形図集成解題』柏書房. 東
 京.
 清水靖夫 1988. 「正式測図以前の諸測図概観: 西日本
 編」. 『古地圖研究』(日本地圖資料協会)395-425.
 村上勝彦 1981. 「隣邦軍事密偵と兵要地誌」[陸軍参
 謀本部編]『朝鮮地誌略1』龍溪書舎. 東京.
 Nam, Young-Woo 1996 [1997]. Japanese Military
 Surveys of the Korean Peninsula in the Meiji Era.
 In *New Directions in the Study of Meiji Japan: Proceedings of the Meiji Studies Conference*,
 E. O. Reischauer Institute of Japanese Studies,
 Harvard University (in print) [335-342].
 Nam, Young-Woo 1995. Japanese Military Surveys of
 the Korean Peninsula, 1870-1899. *Journal of
 Education*, 20: 145-154.